

月刊・神戸 1980/8

# 読書アラカルト

- 海上の友(2) (1~2ページ)
- 私の書斎 (3~4ページ)
- 書評による時評(1)―『戦中決の死生観』吉田清澄稿集をめぐって―  
(5~6ページ)
- 知土誌の窓 (7~8ページ)
- 潮文堂だより (9ページ)
- 校正クイズ (10ページ)



海文堂書店発行

〒650 神戸市生田区元町通3-146

NO.  
9

## 極上の友 (2)

佐高 信

第6号で“定義”したように、私にとって、「極上の友」とは“おいしい本”を教えてくれる人である。前回に続いて、阪神地方に住まいする「極上の友」を今回も2人紹介してみたい。「学兄」と呼んだ方がいい人たちだが、あえて友と呼ばせていただく。

まず、現在、大阪大学教養学部助教授で社会学を担当している井上俊さん。井上さんには『死にがいの喪失』（筑摩書房）という卓抜な評論集があるが、井上さんからは、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』（筑摩書房）をすすめられた。

ここで白状すれば、私が時々、拙論に使う「安定は愛を殺し、不安は愛をかきたてる」というマルセル・ブルーストの言葉は、井上さんのこの本からの孫引きで、“原典”はまだ拝んだことがない。

哲学者の久野収先生の指揮下、中山千夏君などと一緒に私も手伝ってつくった『検定不合格倫理社会』（三一書房）には、ジャン・ピアジェの「子どもの遊戯集団の研究」を紹介したが、これも井上さんの本からの孫引きだから、この「極上の友」についての紹介は、この辺でやめた方が私にとってはよさそうである。

ちなみに『検定不合格倫社』は、もちろん、合格を目標に、隠忍自重を重ねつくったものであることを付記しておく。

井上さんは“山の手”神戸の神戸商大から

“下町”大阪の大阪大学に移った人だが、現在、日本証券経済研究所大阪研究所主任研究員の奥村宏さんは、産経新聞の記者から移った人である。

『法人資本主義の構造』（日本評論社）や、『日本の六大企業集団』（ダイヤモンド社）という瞳目すべき名著を書き、在野にあってアカデミズムの研究者をしのぐ業績をあげている奥村さんは、たとえば『週刊現代』の今年の3月13日号では「経営者は狼が来る、来るとばかり言っていないで、収益が上がって出せるときはドーンと出すべきです。会社が儲けるだけじゃ、何のためにこれまでサラリーマンが犠牲になって減薪、合理化してきたのかわからないじゃありませんか」と、ズバリ言い切るような人である。一方、「組合も定年延長・高齢者対策といった福祉面での充実をはかるのもいいが、基本は賃上げによる生活向上を実現することなので、ベアはベアとして、とれるときは目いっぱい要求しなければ組合員の信頼を失ってしまいますよ」と、組合幹部に対してもきびしい。

拙著『経済小説の読み方』（こう書房）の、「まえがき」にも書いたように、奥村さんは、1978年4月8日号の『週刊東洋経済』「フレッシュマンに読ませたい本」で、私の最初の本『ビジネス・エリートの意識革命』（東京布井出版）を「ビジネスマンの本当の姿が書かれている」として推薦してくれた。それが縁で、それ

まで一面識もなかった奥村さんと私は、奥村さんが上京される折りに話し合うようになったのだが、その熱気と、骨太の理論に私はいつも圧倒される。もちろん、本当の「実力者」に共通しているように、自分の知らないことに対しては、あくまでも謙虚であり、かつ貪欲である。

哲学から出発して、今や日本の企業集団の研究では第一人者となった奥村さんについて忘れられないのは、いつか、自分の経済専門書からヒントを得るといふか、刺激を受けることはほ

とんどないから、経済専門書はほとんど読まない、と言われたことだった。

それでは何を読むのか。一言で言えば、「現実」を最大の教師として「現実」を読むのである。

また、いまから6年ほど前、ネフローゼで息子の真君を亡くした奥村さんから上原専祿の『死者・生者』（未来社）を薦められたことも忘れがたい。



## 私の書齋

島田 誠

「価値ある情報」（ダイヤモンド社）の別冊が「書齋の復活—知的生活の実践」を特集している。

こうした、一種の書齋論ブームの最近の火種は、何と云っても、4年前、講談社現代新書で(注1) 颯爽と登場した、渡部昇一の『知的生活の方法』であろう。

久方ぶりのパンチの利いた読書論で、谷沢永一氏の言葉を借りれば、「昭和ヒトケタ年代生れの知的内面構造を最も率直に語った自画像として、広義の精神史に残る証言ともなっている。『知的生活の方法』は、昭和10年代の『三太郎(注2)の日記』なのである。」小生は昭和ヒトケタ生れではなく昭和10年代後半の生れではあるが、渡部氏の書は、やはり十分に刺激的ではありました。

そして、続いて竹井出版(注3) なるところから『私の書齋』と称する、各界著名人の書齋拝見フオートエッセイの三部作がいずれもヒットし、世の中、老年族の知的願望を再確認させられた幸いです。しかし、ここまでは、第三者的に「いずれは渡部先生の提唱する書齋など持たいたいものだ」「さすがが著名人は優雅なものだ、お金があれば、暮しもちがうわい」と、たかをくくっておりましたが、今度の雑誌のアンケート調査「ナレッジ・ワーカー106人の知的生活の実践」を見て驚ろいた。かなり知的レベルの高い方ばかりを、アンケートしている事情はある

にしる……

既に書齋をもっている人	80%
持ちたいと思っている人	15%
書齋は必要なし	5%

この数字は驚異的ではあるまいか。教育ママ全盛のこの時代、子供に勉強部屋の一室が与えられることはあっても、オヤジの書齋など子供が独立してからその子供部屋を譲りうけるのがせきのやま。きっとこのアンケートの書齋あり派の半分位は、子供部屋譲受型書齋ではあるまいか。

では、書齋を持ってない者は、どうするか？

私からの実践的提案である。

1. 車中読書（以前に位べると、大分減ってきたが、やはり大切にしたい時間だ。朝は、ほど良い緊張が、仕事への頭の準備を、夜は、仕事からロマンの世界への切り換えに役立つ）
1. 喫茶店読書（喫茶店で、自分で買うには馬鹿馬鹿しいスポーツ紙や、漫画本を、タダ読みするのも、たしかに経済的方法ではあるが、やはり、数少ない、ゆとりの時間として読書にあてたい。出勤前30分。会社の近くで、モーニングコーヒーをすすりながらの読書は、王者の愉しみである。）
1. トイレ読書（洋式トイレの発達した今日、トイレの時間を、手持ちぶさたで、いた

ずらにリキんでばかりいるのは、いぎたなく、かつ不恰好である。

新聞の書評や本の広告を眺めながら優雅に、お通じを待つのが、痔の悪化を防ぐ最良の方法である——注記——小生は痔とは無関係。某医師の引用にすぎない)

1. 風呂場読書(風呂の愉しみは、いっぱい機嫌で、歌手きどりで下手な歌を恍惚と唸ることにあるのだが、不粋な女房が「静かにしてください。子供が勉強中です」とか「恥を知って下さい。近所迷惑です」などと、どなる向きにすすめたい次善の楽しみ。1ヶ月前の廃棄処分寸前の週刊誌とか、書名でタダでもらってきたPR雑誌などを持ち込み、濡れることを厭わずに読む。血のめぐり極めてよく、読み残しの記事から、思わぬ発見することあり。)

1. その他、朝メシ読書(女房に嫌われること必定)昼メシ読書(かき入れどきのごみ合っているとき、のんびりと読んでいて、めし屋のおやじに追い出された経験あり)ウォークマン風に、ウォークリーディン

グ(気がついたら、あの世ゆき必定)等ユニークな読書法、お教え願いたい。

では、書斎の、もうひとつの機能である原稿書きはどうするか。この原稿などは、家族の寝静まった夜、蒲団の中で書いて、引き続き朝メシの前の食卓で書きつぎ、さらにこのあとは、出勤前の喫茶店のテーブルへ移るといふ按配だ。また休みの日で、子供はいない、女房は独りで機嫌良く遊んでいる(これも長年の教育の賜物だ。)となると、子供の机、食卓、畳の上、天上天下唯我独尊、どこでもお好きなように。この雑誌の特集で、様々の方のユニークな考えに触発される点も多いけど、要は、自分の心に書斎をもて。物理的な書斎を持ちえない我々にとって我々自身が動く書斎、知的空間である他ないだろうと思う。時間と場所を充分にもちえない同好の士。貴方の工夫を教えてくださいませんか。

(注1) 渡部昇一「知的生活の方法」講談社現代新書 300円

(注2) 谷沢永一「読書人の立場」(桜楓社) P87~P88 1,200円

(注3) 「私の書斎」三部作は、竹井出版から。各1,400円

## 書評による時評(I)

### 『戦中派の死生観』吉田満遺稿集をめぐって

#### 書遊子

ある日一冊の本が友人から送られてきた。あけてみると渋い装釘の本であった。『戦中派の死生観』である。著者はあの『戦艦大和ノ最期』の吉田満であり、昨年9月に他界されたことは知っていた。昭和55年2月5日第一刷と書かれた奥付をみると、遺稿集として文芸春秋より出版された生々しい重さを感じさせる本だった。それというも国際情勢が刻々と変化するなかで、ソ連のアフガニスタン侵攻を契機として、日本の防衛問題が沸騰してきた時であり、タイムリーな出版のこの本を掌にした私自身、薄っぺらな防衛論議に飽きたらぬ思想の重みを感じたかったときだからである。

今の日本の防衛力を増強することは外国から要求されており、それを実施するためには増税しなければ財政的に無理であろう。しかし防衛力増強のための増税は国民が反対するに決っている。そこに施政者のジレンマがある。しかし、国民の側からいえば、ソ連のアフガン侵攻によって危機感は増長されたが、防衛のための増税には反対であるという手前勝手な考えしかもっていない。それは賃上げには賛成で物価上昇には反対だという論理と全く同じである。そして平和の祭典であるオリンピックをも政治的理由でボイコットしたことにさして反対も出ない、というのが現在の日本人の政治感覚となっている。芸術とスポーツと愛は国境を超えるという

のは神話になりつつあるのか……。政治の季節が到来し、じわじわと暗雲がたちこめてくるのを感じる。そういえば「中央公論」八月号の巻頭で、もともと経済共同体を目ざして発足したECが相次ぐ紛争や米国の地盤沈下に対処するために、ヨーロッパの外交的復権をめざして政治的な動きが活発化してきた、と細谷千博教授は鋭く指摘している。このように内外の動きを考え合せると、どうも政治の季節到来は世界的なものようである。

こういう時代においては、へんな危機感を抱いてあわてるよりは、じっくりとこの一冊を読んで、精神的な満腹感を味わってみたい。

『戦中派の死生観』のなかで著者はこう問いかける。

——戦後日本の社会は、どのような実りを結んだか。新生日本のかかげた民主主義、平和論、経済優先思想は、広く世界の、特にアジアを中心とする発展途上国の受け入れるところとなりえたか。政治は戦前とどう変わったか。われわれは一体、何をやってきたのか——

この問いかけは戦後日本の政治風土を根本から問い直そうとしたものであり、こういうところから深く議論を進めないと上すべりの政治経済論、防衛論議に陥いるのは当然である。私が現在日本の防衛論議に左右両派ともにウソを見出すのは、似非民主主義者が自己の権力追求の

ために民主主義という有難いお題目を利用して  
いる偽善を嗅ぎつけるからである。民主主義の  
理念はそんなにたやすく口をついて出るもので  
もあるまい。口に出せば消えていく純粋で誠実  
な薄い絹のようなものである。

8月15日でそれまでの日本がすべて新しく変  
わったわけではない。歴史の断絶なんてありえ  
ない。戦中と戦後の間に横たわるものは何か。  
政治家をはじめ国民の大部分が切り離そうとし  
たものを再度根底から問い直した本はこの本だ  
けでなく幾つかある。丸山真男著『戦中と戦後  
の間』（みすず書房）と脇圭平著『知識人と政  
治』（岩波新書）がある。いずれも思想の重さ  
を感じさせる名著である。これらが追求してい  
るテーマは戦後日本の民主主義において政治的  
成熟はどんな思想のもとでなりえるのか、とい  
う政治の根本問題なのである。例えば脇氏はそ  
の『知識人と政治』の中で戦後タブーであった  
ファシズム論争を真向うから取りあげ、その冒  
頭で、

——戦後「反ファシズム」は所詮「流行現象」  
に過ぎなかったのではあるまいか  
と根本からくつがえす疑問を投げかけているの  
はその真骨頂であるといえよう。——

そして、『戦中派の死生観』の著者も同じよ  
うに問いかけ戦後を批判している。少し長いが  
引用する。

ポツダム宣言受諾によって長い戦争が終  
り廃墟と困窮のなかで戦後生活の第一歩を踏  
み出そうとしたとき、復員兵士も戦後の庶民  
も、男も女も老いも若きも、戦争にかかわる

一切のもの、自分自身を戦争協力にかり立て  
た根源にある一切のものを、抹殺したいと願  
った。そう願うのが当然と思われるほど、戦  
時下の経験は、いまわしい記憶に満ちていた。  
日本人は「戦争のなかの自分」を抹殺するこ  
の作業を、見事にやりとげた、といていい。  
戦後処理と平和への切り換えという難事業が  
スムーズに運ばれたのは、その一つの成果で  
あった。

しかし、戦争にかかわる一切のものを抹殺  
しようと焦るあまり、終戦の日を境に、抹殺  
されてはならないものまで、断ち切られるこ  
とになったことも、事実である。断ち切れ  
たのは、戦前から戦中、さらに戦後へと持続  
する、自分という人間の主体性、日本および  
日本人が、一貫して負うべき責任への自覚で  
あった。要するに、日本人としてのアイデン  
ティティーそのものが、抹殺されたのである。

今年もまたむし暑いなかで終戦記念日を迎え  
ようとしている「きけわだつみのこえ」や「わ  
が生命月明に燃ゆ」も出版物として戦争とは何  
かを考えさせ改めて平和の意味を問い直す機会  
を読者に与えてくれた。そして新たに、この一  
冊をつけ加えたいものである。小林秀雄、吉田  
健一をはじめ多くの心ある文人が前書『戦艦大  
和ノ最期』の出版にあたっては発禁となった時  
苦勞したエピソードが書かれてあり、読後、つ  
くづくと一冊の本のもつ重さを知らされた。

## 郷土誌の窓

梅雨来たれば炎天遠からず、とはいうもの  
の気の減入るような今年の雨だった。それだけに、  
頭上にある青い空が目にしみる。

7月の郷土の話題で、目にふれたものを、読  
者の皆さんにお届けしたい。

一番に注目されるのは、神戸史学会の会誌、  
「歴史と神戸」（現在隔月刊）が100号に到達  
したことが挙げられる。この雑誌は、創刊以来  
今日に至るまで、神戸市資料室の落合重信さん  
によって発行されてきたが、実に一地方におい  
て歴史を主軸とした会誌が800名もの会員と読  
者に支えられるに成長するには、並大抵のこと  
ではなかったろうと推察される。落合さんが18  
年前に創刊号を発行した時は会員ゼロ、それか  
ら今日への道程の中には、神戸学術叢書（第1  
期5冊）の発行や各地での講演会・講座、さら  
には昨年設定された「神戸史学会賞」などの足  
跡がある。市民との連繫、市民の中の歴史を目  
指して前進するこの会の行く手に、僕はさらに  
多くの市民が自らの手で生活を語り、問い直し  
ていく作業が加わっていくであろうことを期待  
し、また確信している。現在、神戸史学会では  
100号までの総索引（101号）の編集に入っ  
ている。「歴史と神戸」はバックナンバーも含め  
て当店で取り扱いしていますので、ご覧のう  
え、興味のある方は定期購読ください。

7月に、太陽出版から郷土の本が2点発行さ  
れた。郷土といっても1点は神戸、1点は播磨  
に関わるもので共に労作で注目されている。

一本は、赤松啓介著『神戸財界開拓者伝』と  
いう。そのチラシの巻頭には、  
開港期の神戸を舞台に活躍し、日本の近代  
産業の礎石となった逸材77人の大いなる開  
拓者精神と果敢な挑戦ぶりを産業経済史の  
視座から正當に評価しようと試みた一大労  
作。

とある。目次を拾ってみると＜マッチ工業を確  
立・滝川弁三＞＜日中貿易の巨頭・呉錦堂＞＜  
酒造経営の近代化・嘉納治兵衛＞＜造船工業の  
建設・松方幸次郎＞など、近代神戸を形成した  
財界人たちを刻明に描いている。現代神戸を知  
るために是非読んでおきたい本といえるでしょ  
う。A5判で、666ページ。定価は3,500円。

もう一本は、山田正雄著『播州黍田村農民の  
歴史』。この本は、江戸時代に黍田村に生きた  
1,320人の農民の姿を刻明に、生き生きと描い  
た「農民の歴史」で、封建制下の農民の姿を描  
いた異色の本。多くの読者に迎え入れられるこ  
とを僕は期待したい。山田正雄さんには、『私  
たちの城東村』『阿弥陀村の歴史』『教育史夜  
話』『黍田村歴史散歩』などの著書がある。定  
価3,500円。

太陽出版刊行のこの2点の本は、ともに当店で  
販売しています。

7月17日の朝日新聞によると、兵庫県教育委  
員会が54年度に県文化財に指定した19件の文化  
財を収録した「県文化財調査報告書」を発行し  
たことが報動されている。その中には、八幡神

社本殿(宝塚市)など建造物3件、木像地藏菩薩像(出石町)など彫刻3件、板碑(姫路市)など考古資料4点などがある。報告書は25ページで、写真と解説からなっている。この報告書

書は、財団法人兵庫県文化協会(生田区下山手通4丁目、県民会館内)に申しこめば、一部千円(送料250円)で入手できます。

(N)

## 海文堂だより

### 8月のフェア 〈健康の本〉

海文堂の8月のフェアは「夏バテにこの本-健康に生きるために」(仮称)といった内容で、健康づくりにかかわる本をお届けします。不順な天候で身体も弱りがちなこの季節、ひとつ試してみてください。一階催しものコーナーにて開催しています。

### ビュッフェ秀作版画展

別館海文堂ギャラリーでは、ますます人気を募めつつあるビュッフェの版画を、11点に限り展示販売いたしております。「カルメン」(300万円)「蘭牛土」(300万円)「ひな花」(24万円)「ポーモンの激合」(27万円)「サントロペ」(30万円)「女を吹く男」(20万円)など、11点をあつめています。ご覧になりたい方は、お気軽に店頭までお申しつけください。ご案内いたします。尚、会期は8月10日(日)まで。

### 店外ミニフェアでは「昭和史を見る」

店外のミニフェアでは、毎日新聞社の本を中心に「昭和史を語る」コーナーを設けています。「読む」というよりは「見る」要素の方が強い本を並べています。「一億人の昭和史」を中軸に、最近の日本人の歩みをグラフと文でじっくり味わっていただきたいと思っております。

### こどもの本(パンフレット)差しあげます。

日本経済新聞社発行のパンフレット「こどもの本田が居きました。日経本紙の婦人欄に掲載されたものの再録で、全部で24点収録紹介されています。「せきたんやのくまさん」「天気図をつくろう」など、この夏やおみに読んでみたい本がドッサリ。ご希望の方は、中央予約コーナーなどに置いてありますので、ご自由にお持ち帰りください。

### 読者からの便り

本日(27日)のFMで偶然の幸を「アラカルテ」でお書きになられた「鄭京和。さんのバイオリンを聞きました。文中の熱い音が、これなんだと感じた次第です。実は全く違うのですが、韓国の磁器作家の「池城敬」氏の作品を十年前に丸善で見た時の感じと同じ横な気持ちです。何か、一歩も「引けない」、衝水の陣を布かれた上での圧倒的な迫力を韓国の人はもっているようですね。日本人には、特に戦後生まれの人にはない筋を感じます。

坂田邦次(日経出版局)

# 校正クイズ

今回は文春文庫の中の一冊、「読書と私」の中から数人の文章を紹介いたします。例によって、誤字・誤句がまじっていますので訂正してください。

- 1 ● 書物を読むことで得る大切な収穫のひとつは、他者を知ることだと思いますが、その時分の私は少しも他者を知ろうとせず、もっぱら自分の気算、内至は両親やまわりの先輩から受けた気算でしか物事を見ていませんでした。私に限らず港の人々は、大体そうやって暮しているようです。  
——〈他者とのキャッチボールを〉 色川武大
- 2 ● 「一冊の本」との激的なめぐりあい、というのは私の場合、いくら思い返してもない。強いていえば、女学生のころ「キューー婦人伝」を読んで、勉強する気になったのが、記憶にのこっているぐらいである。  
——〈小説馬鹿の読書遍歴〉 田辺聖子
- 3 ● 記憶の中の私はふとんの中にいる。お辞儀には茶色っぽい火薬と吸呑みと数冊の小学生全集。風邪ひき、発熱は私の月列行事だった。のどきに来た母が首を寄せる。「ほれ、また手を出して本を読んてる。だから熱が下がらないのよ」  
——〈後遺症〉 永井路子
- 4 ● 本があると、景色がポエムになる。人生という動く景色の中でもそれは何となく他の場所よりもほの明かるい空間を作る。  
遠い昔、始めて母に読んでもらった絵本との出会い。夕陽がさしこんでいる廊下の隅にはみ出してあった父の本箱。まだ読めないのだけれど、何となく胸ときめく思いのした分厚い華表紙の本たち。私にもそんな幾つかの本との出会いがあった。  
——〈佐中人物に恋したころ〉 畑山 博

## 解答

- 1) 収穫→収穫 気算→気算 港→港 2) 激的→劇的 キューー婦人→キューー夫人 3) 火薬→水薬 月列行事→月列行事 4) 始めて→初めて 分厚い→部厚い (のどき→のどき)